

第二回 塩津能の會 九州公演

喜多流

平成27年11月14日(土)午後2時開演

大濠公園能楽堂

福岡県福岡市中央区大濠公園1番5号 TEL 092-715-2155

<http://www.ohori-nougaku.jp>

【鑑賞券】

正面(指定席)/7,000円
 脇正面(指定席)/5,000円
 中正面(指定席)/4,000円
 正面(自由席)/6,000円
 脇正面(自由席)/4,000円
 中正面(自由席)/3,000円

【電話予約・お問合せ】

塩津能の會事務局
 TEL/FAX:03-3330-6803

【オンラインチケット申し込み】

<http://kita-noh.com/ticket>
 (クレジットカード決済・コンビニ購入受取が可能です。)

塩津能の會オフィシャルサイト
<http://www.shiotsu-noh.com>

詳しくはこちらへ→



主催：一般社団法人 塩津能の會

【会場案内】



■西鉄バス 黒門バス停…下車徒歩3分 大濠公園バス停…下車徒歩3分
 ■地下鉄 大濠公園または唐人町…下車徒歩7分

能とは？

能とは舞(動き)と謡(歌・セリフ)による舞台演劇です。しかし、現代の演劇の大半がドキュメンタリー、つまり時間を圧縮した物語であるのに対し、能は逆ドキュメンタリー、衝撃的な瞬間の出来事を引き延ばしたものです。一瞬とは人の出会い、別れ、生死などをいい、これらの背景にあるさまざまな物語を、観る人それぞれが心の中に描きます。これによって能は百人が観れば百通りの見方ができる舞台芸術です。つまり隣の人の感想が違つことが常で、そこが難解と言われるところなのです。しかしこれが能の持つ魅力です。

九州(福岡)での喜多流の歴史

大濠能楽堂を擁する福岡は喜多流にとって由縁の地です。流祖・喜多七太夫長能が黒田藩の庇護を受けたことで開流に繋がりました。また明治維新の動乱期にも喜多流の大先達、梅津只圓が黒田藩のお抱え能楽師として困難を乗り越え、福岡の能楽の隆盛を築きあげました。大濠公園能楽堂の中庭にあるのは只圓翁の胸像です。この由縁の地福岡に、またひとつ能楽・喜多流の新しい灯を燈すために、熊本ゆかりの能楽師塩津哲生・圭介が「塩津能の會」九州公演第二回目を催します。日本が世界に誇る伝統芸術、能楽の精華を、文化豊かに薫る福岡の地に、そして広く九州の地へとあらたに拡げることを目指して活動に取り組んでまいります。

文化継承！

和風建築が減少し、豊の部屋がないという住まいも多く見られ、正座という礼儀作法すら出来ない、知らない人達が増加している現状にはとても不安を感じます。昨今文化発展向上の声はありながら、伝統文化の衰退が目につきます。能界の先人達も能の魅力の後世に伝えようと、明治維新も敗戦の困窮時もひたすらにその道を全うして来られました。喜多流の九州内での催しが激減した現状を何とか再興し、先人の思いを継ぎ伝えることが現代に生きる私達の使命と 생각합니다。



しおつ あきお
塩津 哲生

1945 喜多流職分塩津清人の長男 熊本市出身。
1950 「桜川」の子方で初舞台。
1957 「経政」にて初シテ。
1959 十五世喜多流宗家故喜多実師のもとへ内弟子修行のため上京。
1971 「道成寺」を披き独立。
1986 日本能楽協会重要無形文化財総合指定。
1990 今上天皇即位の礼で「石橋」獅子獅子を勤める。
1996 (平成六年)より流儀の若手育成を一手に担い今日に至る。
2006 芸術選奨文部科学大臣賞受賞。
2007 観世寿夫記念能楽賞受賞。
2008 紫綬褒章受賞。

塩津能の會主宰。
札幌・東京・福岡・熊本・大牟田・竹田各地に哲門会主宰。



しおつ けいすけ
塩津 圭介

1984 喜多流能楽師塩津哲生の長男として東京に生れる。
1987 喜多流例会能にて、初子方「隅田川」を勤める。
1996 子方の卒業試験とも言われる「鳥帽子折」を勤める。
1997 大分県竹田市塩津清人記念能舞台落成能にて初シテ「田村」を勤める。
2004 若者の「若者」による、若者のための能「若者能」をたちあげ、以後毎年公演。
2008 東京学芸大学教育学部卒業。
2009 APU立命館アジア太平洋大学非常勤講師に就任。
2011 喜多流青年能にて能楽師の登竜門「狸々乱」を披く。

番組

塩津能の會 九州公演

おはなし

塩津 圭介

舞囃子

頼政

塩津 哲生

大鼓 白坂 保行
小鼓 飯富 章宏

太鼓 吉谷 森田 徳和 潔

地謡

渡辺 康喜
佐々木多門
友枝 真也

大島 輝久
狩野 了一
笠井 陸 成信

(休憩二十分)

能
船弁慶
シテ 塩津 圭介
子方 大島 伊織

ワキ 御厨 誠吾

大鼓 白坂 保行
小鼓 飯富 章宏

太鼓 吉谷 森田 徳和 潔

ワキツレ 坂苗 融
ワキツレ 則久 英志

間狂言 野村 万禄

後見

狩野 丹秀
中村 邦生

地謡

渡辺 康喜
佐藤 寛泰
友枝 真也

大島 輝久
内田 成信
狩野 了一
佐々木多門

(終了予定午後四時半頃)

よりまさ
あら すじ
頼政

源氏旗揚げの魁、文武両道の武者の最期を描いた名作。
歌人を自称する武将は多いが頼政は質量とも真正の歌詠みである。
頼政は終生、平清盛と親しかったが、七十七歳の高齢で反旗を翻す。
敗死したとはいえ源氏復興の先鞭を付けたのは頼政なのである。



前場の文章は川霧立ち籠める宇治の風致描き、後場も「平家物語」の名文を多く採りいれている。本日演ずる宇治川の合戦の場面は床机に掛けたままの静止場面が多く、それでいて内容を感じさせるにはシテの芸力が豊かでなければならぬ。

あら すじ
ふなべん けい
船弁慶

兄、頼朝と不仲になった九郎判官義経は、弁慶達を引き連れ西国へ落ち延びる途中である。弁慶の進言で静御前をここから帰すことになる。別れの酒宴で謡い舞った静は涙ながらに立ち去る。
海上に出現した平家一門の怨霊、知盛の霊が襲い掛かるが、弁慶の法力には勝てず、波間に消えてゆく。



能面/小面(こおもて)



能面/怪士(あやかし)